

求められるマレーシア政治の再評価

——『ペナン・ストーリー』国際会議報告より——

篠崎香織*

2002年4月、国際会議『ペナン・ストーリー』が行なわれた¹。本会議の主催者は Star 紙と、ペナンの歴史的建築物や古い町並みの保存・修復を主な活動内容とする NGO 組織 Penang Heritage Trust であった。本会議は、ユネスコの世界遺産としてジョージタウンを登録することを目的としたプロジェクト『ペナン・ストーリー』（<http://www.penangstory.net/index.html> を参照）の一部で、様々な角度からペナンの歴史的・文化的価値を評価・再認識し、プロジェクトの成功につなげようという趣旨の下に行なわれた。

研究報告自体も非常に充実していたが、その成果を何らかの行動につなげようとする積極的な意志の感じられるプログラムも非常に印象的であった。例えば、ユネスコの同事業の地域担当者である Richard Engelhardt 氏 (Regional Adviser for Culture in Asia and Pacific) を招き、ペナンが世界遺産に指定される可能性についての講演があった。ユネスコの世界遺産へ名乗りをあげるには、まず中央政府からの推薦が必要となるが、現在それがどのような過程にあるのか、また州政府として中央政府にどのような働きかけをしているのかを、ペナン州主席大臣の Koh Tsu Koon (許子根) 氏を招いて討論するパネルも設けられた。さらにその合間を縫って、ペ

ナンの歴史的・文化的ポイントを紹介するツアーが行なわれたり、クローキング・ディナーを Khoo Kongsi (邱公司) にて行なうなど、趣向を凝らしたプログラムも満載で、ペナンのよさを知ってもらい、それを存分に楽しんでもらおうとする主催者の熱意が伝わってくるようであった。

今回の会議は、12ヶ国から60人の報告者と200人の出席者を迎えたが、日本からの報告者は少なく、宇高雄志氏 (広島大学工学部建築学科助手、マレーシア科学大学住宅・都市計画・建設学部研究員) と筆者のみであった。

研究報告

今回の会議のテーマは、大きく二つに分けられよう。一つは、歴史的・文化的価値のある建築物をいかに保存・修復し、近代的で便利な生活と両立させていけるかというテーマである。もう一つは、ペナンの歴史や文化に関する議論である。数としては後者の研究報告が多数を占めた。なお、これら報告の要旨を以下のサイト：<http://www.penangstory.net/main-oldpg.html> にて見ることができるので、こちらも参考にされたい。

(1) 歴史的・文化的遺産との共存

Chinese Clanhouse Development というパ

¹ The Penang Story: International Conference 2002, 18-21 April 2002, The City Bayview Hotel, Penang.

* 東京大学大学院・博士課程

ネルにおいて Lim Gaik Siang 氏が報告した“Khoo Kongsi Clanhouse and Community: Transformation of Social and Spatial”と、Architectural & Social Heritage にて宇高雄志氏が報告した“The Living Culture, Lessons From Little India”は、現在ペナンにおいて歴史的建築物の修築・保存に関して共通する問題を指摘している。両氏が指摘するのは、2001年7月に廃止された Rent Control Act の影響である。両氏に拠れば、この条例によってショップハウスを賃貸する際の賃貸料が抑えられるが、又貸しをする際にはこの条例の管理を受けず、賃貸料をあげることが可能となるために又貸しが増え、建築物の修築・保存の許可を取るにも元の持ち主を探すのに苦労したり、持ち主と借主の利害が対立するなど修築・保存が思うように進まないという事態を生むものではあったが、ショップハウスの利用を促進し、「生きた」遺産としての機能を可能とした大きな要因であったという。だが今回、同条例が廃止されたことで賃貸料が跳ね上がり、それまでショップハウスを利用してきた人が立ち退かざるを得ない状況が生じ、「生きた」遺産としての存続が危惧されると指摘する。

(2)ペナンの歴史と文化

ペナンの歴史といえば、交易やコミュニケーションの中心としてのペナンの役割が思い浮かぶが、それらの議論は“Early Penang: Trade & Shipping”や“Penang as a Regional Centre”などのパネルで展開された。前者のパネルにおいて Loh Wei Lin 氏は“Penang’s Trade and Shipping in the Imperial Age”と題した報告で、

植民地期以前から存在したアジア域内交易が植民地後も世界交易において大きな位置を占めていたこと、ペナンはそのような交易の基地として機能し、その中での主役はヨーロッパ人ではなく中国系商人であり、アジア域内交易を再評価する試みが提示された。後者においては、Khoo Kay Kim 氏による“Tanjong, Hilir Perak, Larut and Kinta: The Penang-Perak Nexus in History”や、Phuwadol Songprasert 氏の“The Implication of the Penang Connection in Southern Thailand”などの報告において、ペラやタイ南部の錫鉱山やプランテーションを営する中国系商人にとって拠点としてのペナンの姿が鮮明に描かれた。

植民地期のペナンの産業や交易において中心的役割を果たしたのは中国系ビジネスマンであったことが以上のパネルで確認されたが、それがいかなる社会構造に支えられ、またそこにかかなる政治が展開されたのかを論じたパネルが“Overseas Chinese Networks & Revenue Farming”であった。*Opium and Empire* で19世紀のシンガポールにおけるアヘン・シンジケートの盛衰を丹念に論じた Carl Trocki 氏は、その著のなかで1880年代以降、マラヤの、いや東南アジアのアヘン市場がシンガポールのビジネスマンからペナンのビジネスマンの手に移ったことを論じ、その要因として、強大になりつつあるシンガポールのシンジケートを牽制するために、植民地政府がペナンのビジネスマンに肩入れしたことを指摘した。だが今回の報告では、シンガポールの中国系ビジネスマンが香港を中心とし、アメリカやオーストラリアに張り巡らされたアヘン・シン

ジケートに乗り出し、マラヤでのシンジケート経営にはそれほど興味を持たなくなり、そこにペナンのビジネスマンが入り込んだ可能性もあるとの仮説を紹介した。

中国系ビジネスマンの活動を支えた基盤として「会党」や「秘密結社」などがしばしば引き合いに出されるが、“Secret Societies”というパネルも設けられた。Ho Egn seng 氏は、“Gangsters into Gentlemen: The Break up of Multiethnic Conglomerates and the Rise of a Straits Chinese Identity in Penang”において、1870年代以降植民地政府が「秘密結社」を弾圧する一方で、その指導者を優遇したことにより、親イギリスの Straits Chinese というアイデンティティを持つ人々が登場したことを論じている。また、こうした組織が中国系だけの専売特許ではなく、ヨーロッパ人のフリーメーソンも活動の実態としては同じようなものであったことを指摘したり（Jean De Bernardi, “Expanding the Boundaries of Europe and China: European Freemasons and Chinese Sworn Brotherhoods in Penang”）、マレー人やインド人、中国系の結社がエスニックな枠を越えて連携し、植民地政府に対して異議申し立てを行なった事例（Anoma Pieris, “Reconstructing ‘History from Below’: Doubtful Associations: Reviewing Penang through the 1867 Riots”）も報告された。

マレー世界に関するパネルには、Contrasting Worldviews: Nusantara & European Perceptions of Colonial Penang があった。ここでは Ariffin Omar 氏が“British

Colonialism and the Marginalization of the Malays in Penang”と題した報告を行なった。植民地統治の到来は、中国系を中心としたエスニック集団に対して経済的発展の余地を与えたが、マレー人を経済的に周縁化するものであったとの指摘は、*Bangsa Melayu* の著者にしてはあまり魅力的でなかったように思う。

Religious Communities & Historical Minorities と題したパネルでは、Clementi Liang 氏による“The Pre-War Japanese Community in Penang (1890-1940)”という戦前のペナンの日本人コミュニティに関する発表があった。当時のペナンの日本人は、今日の日本人とは違い、他の移民と同じように開拓精神に富み、様々なコミュニティと深い関わりを持ち、現地コミュニティは彼らがもたらす新しい技術を享受していたと論じた。これに対しフロアから、平凡な一写真家であった人が実は日本軍の情報員だったというケースもあり、戦前のペナンにおける日本人コミュニティを、単純によき隣人だったとまとめることは妥当ではないという指摘がなされた。また Judith Nagata 氏は、ペナンの都市開発における土地を巡る政治において、ムスリム・コミュニティがエリートに対して、あるいは他のエスニック集団に対して、“*waqf*”（喜捨、主に土地を媒介とする）の概念を再解釈し、対抗理論とする現象を報告している。

討論会

3日目の午後は討論会が行なわれた。テーマは Historical Recovery (司会に Cheah Boon Keng 氏、討論者に Paul H. Kratoska 氏、Lee

Kam Hing 氏, Badriyah Salleh 氏, Tan Leok Ee 氏)と Cultural Diversity であった。

筆者はこのうち後者に出席した。このパネルの司会は開発と女性・子供、イスラム、オラン・アスリなどを研究対象とする Wazir Karim Jahan 氏、討論者はヨーロッパにおける多元主義を専門とする Christian Giordano 氏、文化の維持や共存を研究する M. Nadarajah 氏、エスニック集団に基づくマレーシアの政治を批判的に論じる Sumit Mandal 氏、マレーシアとスマトラをフィールドに Mandailing 移民を研究している Abdul-Razzaq Lubis 氏、マレーシアのイスラムや、エスニック集団間の関係を研究する Judith Nagata 氏の 5 人であった。

ここで共通の話題となったのは、マレーシアにおいて全ての人々が民族的出自に関わりなく平等に扱われるにはどうするべきかという問題であった。こうしたテーマは、マレーシアに関する学会や研究会で常に論じられるが、報告者の指摘することはほぼ同じであるように思われる。それは、エスニックのカテゴリーをなくせば、問題は解決しうるといふものである。それゆえこのようなテーマを設定したパネルでは、「Chinese」や「Malay」というカテゴリーが内部にいかにも多様なものを内包することを指摘し、それにもかかわらず一括りにしてしまうような主体を糾弾するというのが一般的であるように思われる。今回の議論もまたそうであった。

今日のマレーシアでは、社会的上昇の機会を獲得する際、ある特定の集団に属していることで、能力が不足していてもそれを享受しうる人がいる一方、より能力があると思われるのにその集団に

属していないために、その機会を逸してしまう人がいる。このような状況はないほうが確かに健全だろう。だが現在のマレーシアにおいて、エスニックの枠をとっぱらえと言うことが、問題の所在を見極め、それを解決しうる有効な方策を提供することに繋がっているようには思えない。また、ある範囲においてメンバーシップを括り、その枠を生かしてよりよく生きようとする行為自体を、何でもかんでも批判していいというわけでもあるまい。共通のパイを共有している人々との競争の中で、ある範囲で自己と他者を区切り、競合していこうということ自体は問題の本質ではなく、自他を区切った後、いかに他者と平和裏にパイを分け合っているかというところなのではなかろうか。

筆者は、マレーシア人全体のリーダーとしても位置付けられるような今日のマレー人政治指導者は、パイの分配方法においてももう少し評価されてもいいと考えている。また、マレー人政治指導者に様々な主体が圧力をかける際、常に言葉を介する議論によってそれを行ない、実力行使をルール違反だと認識し、それを遵守するマレーシア社会のあり方も肯定的に捉えていいのではないかと思う。マレーシアのエスニック集団間の政治を、ネガティブな視点で捉えて糾弾するだけでなくポジティブに捉え、エスニック集団間の問題を解決するいくつかのモデルを他地域に提供するような試みもなされてしかるべきであろう。